

Title	精神の目覚め -習慣のペルクソンの根源について-
Author(s)	山内, 翔太
Citation	宗教学研究室紀要 (2015), 12: 149-171
Issue Date	2015-12-08
URL	http://dx.doi.org/10.14989/202525
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

精神の目覚め——習慣のベルクソンの根源について——

山内翔太

Le réveil de l'esprit - Essai sur l'origine bergsonienne de l'habitude

Shota YAMAUCHI

En analysant, dans le deuxième chapitre de *Matière et mémoire*, des faits physiologiques pour élucider la théorie proprement philosophique du souvenir et de la mémoire, Bergson traite de l'« habitude » comme modification des « reconnaissances ». Selon lui, l'habitude consiste à évoquer l'image-souvenir utile pour interpréter la situation présente, puis à organiser, en tant qu'intermédiaire, la relation entre la perception et le mouvement corporel.

Nous clarifierons l'origine bergsonienne de cette habitude pour révéler le pragmatisme métaphysique de Bergson.

Nous éluciderons le processus d'acquisition de l'habitude, c'est-à-dire la transition de la reconnaissance attentive à la reconnaissance automatique. Déroulant le « schème moteur », qui est une esquisse du mouvement comme sensation musculaire, la reconnaissance attentive est la projection des souvenirs sur la perception actuelle. Quant à la reconnaissance automatique, elle est le mouvement musculaire réflexe conforme à l'impression présente. Le schème est l'intermédiaire de l'apprentissage, et le jaillissement du schème l'habitude dynamique. Même lors du travail intellectuel, on compose, en tant qu'idée générale, une sorte de schème, et l'on résout finalement des problèmes par le moyen du « schéma dynamique » (thématisé dans « L'Effort intellectuelle »), qui est en quelque sorte un schème plus mental et créateur dans la reconnaissance attentive profonde, ou plutôt dans l'attention même, qui s'actualise au fond de tout le processus.

C'est dans tous ces progrès d'habitude que fonctionne nécessairement l'« attention à la vie » comme disposition de l'esprit réveillé. Du point de vue mnémonique, Bergson l'appelle aussi le « bon sens ». Enfin, nous verrons que c'est par cette habitude originale de la mémoire, ou origine de l'habitude, que l'on peut avoir l'expérience continue de la réalité.

「原始が軀を踏んでゆく。

荒涼と交はる生の方へ。」吉田一穂「零時」より

序

アンリ・ベルクソン(1859-1941)は、純粹持続の哲学者であり、創造的進化の哲学者であり、エラン・ヴィタールの哲学者である。しかし無論のことであるが、彼はそのような根源的な実在の概念を特権的なものとして語り出すだけでなく、そこから懸け離れているかのようにすら思えるありふれた日常の構造、ほとんど同じことの繰り返しを行う生活の構造を精緻に分析することを忘れてはいなかった。この日常性の構造を、或る既知の対象を何らかの仕方ですれとして認知する「再認 (reconnaissance)」の構造として論じたものが、『物質と記憶』第二章「イマージュの再認について—記憶と脳」である。その章においてベルクソンは当時の生理学や心理学の精華が発見した諸事実や諸解釈を豊富に援用し、それらを批判検討しつつ再認構造の考察を進めているのであるが、そこを一貫しているのは、記憶が脳から独立しているという根本理論の導出と日常的経験におけるその根拠付けという彼の意図である。逆に言えば、ここでは精神としての記憶と身体器官としての脳という理論的には全く別の二つの要素が交叉する場面として、再認が考えられている。この再認は、身体の側面と記憶の側面双方の関与の仕方の違いに従って、二種に分類されている。すなわち、一方で対象を反射的に解して、何らの判断を交えずに身体的運動で反応する再認は「自動的再認 (reconnaissance automatique)」と呼ばれ、他方で、対象に相似した記憶を想起し用いることで対象を解釈し、的確な反応を準備する再認は「注意的再認 (reconnaissance attentive)」と呼ばれる。様態の違いは大きいものの、何れにおいても、対象の認知という認識論的契機が身体的運動による反応という行動論的契機と同一線上のものとして捉えられていることが特徴である。

本稿は、『物質と記憶』におけるこの二種の再認の構造を、広く身体と精神の行動の紐帯としての「習慣」として理解する。そしてその論証の結果として、以上の習慣としての再認を成立せしめる根源を指し示し、ベルクソン哲学の裏面に潜む形而上学的プラグマティズムとでもいうべきものの一端をそこに見出すことを目的とする。但し、『物質と記憶』において「習慣 (habitude)」という語は、頻繁に用いられる一方で、術語として明確に定義されているとはいえない。確かに大方が自動的再認を言い換える言葉として使用されているものの、その時々の意味には依然として曖昧さが残っているし、それに止まらない箇所もある。しかし本稿は、この習慣という語が自動的運動ではなく運動の認知の習慣を指

している局面を挙げ、更にその延長線上で、思考の場面においても習慣が考慮されている箇所を提示することで、むしろそのような語の使用の曖昧さにこそ習慣概念の豊饒を見出すことを企図している。習慣の概念は、ほとんど生理学的なメカニズムによってのみ行われる身体運動から記憶力そのものである精神の運動に至るまでの変化、そして両者の間の交通を指すこととなるだろう。そして、そのように動的に捉えられた習慣は、自ずとその重心を惰性的な身体から能動的な精神へと移すはずである。本稿の狙いは、再認という日常性の構造からこのような動性を含み込んだ習慣の概念の深みを闡明することにある。

そのためにまず本稿が執り行うのは、『物質と記憶』第二章における習慣の獲得過程の腑分けである（第一章）。この分析においては、同書第三章「イメージの残存について―記憶力と精神」で主題とされる記憶の形而上学的な理論を横目に見つつ、先に述べた自動的再認と注意的再認、とりわけ後者の概念を記憶論の細部に沿って境界画定する。その後、注意的再認を認知の習慣として規定した後、媒体をなしている図式概念に焦点を絞ることで、習慣の動性を探る（第二章）。ここでは、『物質と記憶』第二章における運動図式概念を取り扱うのみならず、後年の論文「知的努力」においてより知的かつ創造的な図式として考え出された動的図式概念とそれを照らし合わせ、両者の射程を明確化すると共に（同章第一節）、その接合点を『物質と記憶』第三章の一般観念についての議論に見出す（同章第二節）。最後に、ここまで議論の俎上に載せた何れの概念にも自立性が見出せないことを確認しつつ、根柢からそれらを駆動する精神の根源的性向である「良識」、或いは「生への注意」を示唆する（第三章）。

第一章 習慣獲得の過程と二つの再認

本章では、『物質と記憶』第二章に描写されている行動の習慣付けの様子を分析しつつ、その内容となる自動的再認と注意的再認の具体的な規定を闡明していく。その際、『物質と記憶』の他の章で提示されている関連概念を参照することで境界画定を明示しつつ、同書の形而上学を構成する根本的な諸概念へ基づけて説明を行うことで、習慣という契機、すなわち二つの再認が『物質と記憶』全体の中でどのような理論的地位を占めているのかをも仄示することを試みる。

そのために、少々長い引用になるが、ベルクソンが日常的事例に則して習慣獲得の様相を語り出している以下の一節を分析するところから始めたい。

「例えば、私は或る町を初めて散歩する。各々の曲がり角で、私は躊躇し、私は行く場所が分からないでいる。私は不確かさの中にいて、それによって私の身体に複数の選択肢が提示されていること、私の運動が全体的に非連続的になっていること、そして諸々の態度のうちのどれにおいても、来るべき態度を告げて準備してくれる何物もないことを理解する。その後、町に長く滞在して長くなれば、私がその前を通り過ぎるものを判明に知覚することなく、私は機械的に町を回っているだろう。ところで、このような両極端の状態の間、すなわち、知覚がまだそれに随伴する明確な運動を組織化できていない状態と、この随伴する運動が私の知覚を無益にするほどまで組織化された状態の間に、中間の状態がある。そこでは、ものは覚知されるものの、互に結合されて連続した諸々の運動、互に要求し合う諸々の運動を引き起こすのである。私は、私の知覚のみを判別する状態から始めたが、最後には最早ほとんど自分の自動運動しか意識しないようになった。そして、その中間に、混合的な状態、すなわち生まれかけの自動運動 (automatisme naissant) によって際立たせられた知覚が存しているのである。さて、後者二種の知覚が身体を機械的で的確な反応へと導く点で最初の知覚と異なっているとしたら、そして他方で、更新されたこれらの知覚が、親近的な或いは再認された独特の相貌をもって精神のもとへ現われるとしたら、よく統御された運動的随伴の意識、組織化された運動的反応の意識が、ここで親近感の基底 (le fond du sentiment de la familiarité) となっていることを我々は前提すべきではないだろうか。従ってまさに、再認の基礎には、運動的秩序の現象が存しているのであろう」(MM,100-101/238-239)。

ここには、三つの知覚の階梯が論述されているので、順に解析していこう。

第一に、見知らぬ町に来たばかりで何も分からない状態、つまり知覚と運動を対応させることが出来ず、再認出来ない状態がある。この状態では、選択肢として道があるのが分かるだけでどれも行き先が分からない。また、町の全体像も皆目分からないのでその選択肢同士の繋がりも分からない。従ってその各々において、足をどちらに向けるかなどの来るべき態度を告げて準備してくれるような目印が見出されない。この状態で、我々は当然不安な感じを覚え、行動を躊躇する。

第二に、少しは町のことが分かるようになった「中間の状態」、すなわち知覚と運動の対応関係が流動的である状態がある。一つの覚知された対象に対して「互に結合され、連続し、互に要求し合う運動」が提示されるため、確かにどの道をどう進むかは未だ非決定ではあるが、その分、大通りを行けば駅があり、あの角を曲がれば確か役所があるはずだ、など諸々の選択肢がそれぞれ一つの町の全体像の上で構造化されてきている。であるから、この段階では、ここに花屋があるということは今あの通りを歩いているのか、というよう

に、それら相互の可能性を、次の運動を誘導する既視感や親近感を頼りにしながら過去の似た記憶をあれこれ辿り、知覚に合わせるという営為が要求される。ここで我々は、「反省 (*réflexion*)」すなわち「対象と同一または類似し、そしてその輪郭に合おうとする、能動的に想像されたイメージの外的投射」(MM,112/248)を行っている。これこそ「注意的再認」に外ならない。

以上を経由して、第三に、町を知悉して知覚と運動が一対一対応を形成した状態に至る。これが、「自動的再認」である。この自動的再認は、知覚に対応した行動が瞬時に実行に移されるという「瞬間的な再認」(MM,100/238)である。また、それ自体は記憶力を用いないものの、記憶力を用いた注意的再認の過程の反復によって形成されていることから「記憶力に照らされた習慣」(MM,89/229)と呼ばれたり、注意的再認と対比される形で「放心からくる再認 (*reconnaissance par distraction*)」(MM,107/244)と言われたりもする。この場合、最早イメージの反省を必要とせず、ただ反射的に身体のみで運動がなされる。自宅に帰る道をいちいち考えなくても、目に映るものに何となく感じる親近感の誘導に任せて身体が半ば勝手に動き、帰り着くのである。

このように町を知る過程において、当然ながら私は町に長く滞在している間にその町の中を何度も歩き廻っていることであろう。つまり町歩きの反復において、第二段階である注意的再認は少しずつ進展し、変容しているはずであり、その変容を経て第三段階の自動的再認に至っているはずである。ベルクソンによれば、「反復の真の効果とは、まず分解し (*decomposer*)、次に再構成し (*recomposer*)、そして身体の理解力 (*intelligence du corps*) に訴え掛けることである」(MM,122/256)という。

ここではまだ真意が明瞭ならざるものの、分解と再構成という作業が注意的再認の過程の内容を指すことは理解出来る。しかしながら、それらが訴えかけるところの「身体の理解力」とは、やや比喩的な言い回しである。これは、実際に運動する身体そのものの感覚—運動の連動構造、つまり「神経系の感覚—運動的平衡 (*équilibre sensori-moteur*)」(MM,91/231)に他ならない。これは「運動メカニズム (*mécanisme moteur*)」(ibid.)とも呼ばれ、脳や脊髄などの器質的、解剖学的な神経系を指している。この「身体の理解力」は、別の箇所では「感官の教育 (*éducation des sens*)」(MM,48/198)と呼ばれる事柄に等しい。「感官の教育」とは「感覚的印象とそれを利用する運動の間に成立する繋がり全体」(MM,102/240)のこと、つまり感覚と運動の対応の体系的構造のことであり、印象に対する運動の反復によって形成されるものである。反復を経て、感官の教育は、「感官同士を調和させ、私の身体の要求の非連続性そのものによって断ち切られた連続性を感官の所与のうちに再び打ち立て、物質的世界の全体を近似的に再構成する」(MM,48/198)までに至る。つまりそれは、一つの対象について与えられる諸々の知覚がそれに対応する各々の要求によって分離されている状態にあるのを統合する。より具体的に言えば、レストランの厨房から漂う美味そうな匂い、テラスからの眺望、食事する客達の喧噪、日だまりの心

地いい暖かさといった個別の行動の要求に対応した個々の全く異質な知覚を一つの器質的な感覚—運動の体系として纏め上げ、知覚世界を構成するのである。分離を残した知覚の統合というこの意味で、運動メカニズムは「理解力」と呼ばれていたのである。ベルクソンによれば、この感覚—運動の連動形式という運動メカニズムの態勢に則った、直後の未来への私の態度、切迫した私の行動こそが、「私の現在」なのである（MM,156/282）。そして、このような運動と知覚の全体の組織化が「習慣」と呼ばれている（MM,101/239）。

しかし、「私の現在」という「習慣」は即座に行動を志向していることから分かるように、むしろ自動的再認に属するものである。注意的再認は、自動的再認に至るまでの途上に相当するが、反復の中においてこの感覚の教育に基づき、その進展に平行しつつも、それとは異なる回路を持っている。すなわち、そこには「反省」という精神の能動性が関与している。注意的再認は、言わば感覚から運動へ移行するその間、「私の現在」を引き延し、「習慣」を押し広げる精神の営為なのである。

まず確認すると、注意的再認における反省とは、過去の記憶のイメージを知覚の輪郭に合わせて投影するという点で、精神の能動性である。当然のこととして、この記憶の投射によって知覚はより判明に理解されなければならないだろう。よって、注意的再認において重要なのは、知覚と記憶が相互にフィードバックしていることである。その場合、両者は同一性や類似性をもとに輪郭を同じくする関係にあることになるので、注意的再認においては、精神の「知的拡張（*expansion intellectuelle*）の努力が増大する」（MM,114/250）につれて、反省の範囲が、つまり思い出される記憶の範囲が広がることになる。すなわち、記憶が膨張するにつれて投射される記憶が増え、その分眼前の対象の細部の理解が深まる。このようにして、知的拡張が「対象に結び付きうるような、益々膨大な体系」を改めて創造し、記憶の投射の詳細さに対応して、「対象の背後にあって、対象そのものと共に潜在的に与えられている」「現実のより深い層」を見出すのである（MM,115/250）。よって「知的拡張の努力」とは対象の記憶の細部や対象にまつわる諸々の事象の記憶をより詳らかに呼び覚ますことを意味しているだろう。この努力によって投射される情報量が増加すればするほど、対象を取り巻く現実の認知出来ていなかった潜在的部分が意識へともたらされる。

原理的に言えば、このような作業が前提しているのは、想起されるべき一回一回の町歩きの経緯が全て蓄積されているような、記憶の総体でなければならないだろう。実際、『物質と記憶』によれば、過去は委細漏らさず丸ごと、しかも「本性的必然性の効果のみによって」その全てに日付と場所が与えられて保存されるという（MM,86/227）。ベルクソンは、ここで保存される記憶内容のことを「純粹記憶（*souvenir pur*）」、それを保存する精神作用のことを「勝義の記憶力（*mémoire par excellence*）」（MM,89/229）と呼ぶ。この作用は意志的なものでもないし、また何らかの能力でもない。文字通り、純粹記憶を保存する記憶力は「自然に働く記憶力（*mémoire spontanée*）」（MM,89/229）であり、純粹記憶

は「自然に生じた記憶 (souvenir spontané)」(MM,93/233)なのである。この純粹記憶は、別の箇所で「観念性」(MM,155/282)という語で形容されているように、即自的に存在しているが、全く非延長的で、物質的世界に対して無力な(その限りで無益な)ものである。つまり、それは全く潜在的な(virtuel)ものである(MM,155-156/282)。これは重要なことだが、その点で純粹記憶は、延長的で行動にとって有益なもの、つまり現在与えられている感覚、或いは想起されイメージされた記憶としての「記憶心像 (image-souvenir)」と本性を異にする(ibid.)。ベルクソンによれば、記憶心像はイメージとして現実化されている時点で既に先の感覚—運動的な「私の現在」と混淆しているのであり、純粹記憶としての過去の性質を喪失している、というのである。この観点から言えば、注意的再認は、潜在的な純粹記憶を記憶心像へと現実化する活動なのである。

そして、この純粹記憶を基底としてベルクソンは、記憶の個別性の度合に無数の段階を考えている。それを表わすのが記憶の逆円錐モデルである。純粹記憶の全体を指す逆円錐の底面 AB から、反射的な感覚—運動メカニズムから構成される「私の現在」を指す頂点 S の間に「我々の心理的生の無限の反復の余地」(MM,181/302)、言い換えれば「記憶力の無限に多様な可能的状態」(MM,187/307)があり、それら各々が円錐の断面 A'B'や A''B''で表わされることになる。記憶力が拡張していればしている程、つまり断面が底面 AB に近ければ近い程、箇々のイメージは具体的で「個人的な」内容を持ち、反対に記憶力が収縮していればしている程、つまり断面が頂点 S に近ければ近い程、箇々のイメージは一般的ないしは抽象的で「ありふれた」ものとなる(MM,188/308)。先述の注意的再認において記憶力は、これら記憶の種々の平面と眼前の感覚ないし知覚の間を「閉じた回路」(MM,114/249)として往還するのであり、そして、それによって適切に選択された記憶心像を現在の意識に表象しようとする。ベルクソンの言葉を借りれば、このことは次のように表現される。「従って同じ心理的生は、記憶力の継起的な階層において無数に反復されるのであり、そして精神の同じ作用はその異なる高さにおいて演じられうるのであろう。注意の努力のうちで、精神は常に全体として与えられているが、精神が己の進化を完了させるために選んだ水準に応じて簡略化したり複雑化したりするのである。精神の方位を決定しているのは、通常、現在の知覚である。しかし、我々の精神が採用する緊張の度合に応じて、つまり我々の精神が身を置く高さに応じて、この知覚は我々のうちで出来るだけ多くの記憶心像を発展させるのである」(MM,115-116/251)。

更に、このような記憶力の緊張による注意、すなわち先に言及した知的拡張の努力には、次の二つの側面が存している。記憶力の働きの諸相について論じている『物質と記憶』第三章によれば、「記憶力の全体は現在の状態の呼び求めに対して二つの同時的な運動を以て対応する。一つは並進運動 (translation) であり、それにより記憶力は経験を迎えにその全体で赴き、そしてそのような仕方では分割されることないまま、行動の観点に合わせて様々な度合で収縮する。もう一つは記憶力それ自身の自転運動 (rotation) であり、それにより

記憶力はその瞬間の情況の方を向いてそれに最も有益な面を提示する」(MM,188/308)。このことを簡単に整理すれば、記憶の具体—抽象の諸相の間を往還する縦の運動の側面が並進運動であり、任意の記憶平面全体の中を移動しその範囲を定め有益な記憶心像となる記憶を提示する横の運動の側面、つまり記憶力の方向付けが自転運動である、ということになる。やや観点を変えて陳べれば、記憶を現在の知覚に連合させる際、前者は過去の記憶との類似性(similitude)によるのだが、後者は記憶間の連なり、そこから広がる無数の記憶の近接(contiguïté)によるのである(MM,186/306)。屢説してきた注意的再認はこの二重の側面を持つ記憶力の運動に外ならない。また、それが現在の知覚を反映した精神の方位付けであるとされていたことを顧慮すれば、特に後者の自転運動に重点を置いた活動であると言える。

では、注意的再認や自動的再認に随伴する例の独特の「親近感」、つまり再認の感情とは何を指しているのか。ここまでの分析から少なくとも言えることは、感官の教育によって統御され組織化された感覚—運動(反作用)のメカニズム、そしてそれについての意識というものがあり、メカニズムの定着の度合によってその意識が、生まれかけの自動運動についての意識か(注意的再認)、或いは自動運動そのものについての意識か(自動的再認)に分類されるということである。この運動の意識に基づいているゆえに、運動の定着が進むのに併せて、不確かな感情からその対象を見知っているという独特の感情へと、知覚に付随する印象が移ろい行くことになる。つまり、自動的再認に近付けば近づくほど親近感が強まる訳であるから、「対象がただ眼前にあるというだけで所定の行動を起こすよう誘導してくる」という感情が親近感の内実となる(MM,103/240)。反対に注意的再認の場合は、自動運動の感覚ではなく生まれかけの運動の感覚しか得られないため、行動を誘うこの親近感が弱くしか感じられないことになる。しかしながらそうであるからこそ、感覚と運動の間にインターバルが生じ、記憶力を用いて反省的に知覚することが可能になっている。言わばこの時、記憶の知的拡張によって過去をも現在に含み込むことで私の現在の幅が広がっているのである。注意的再認は或る意味では自動的再認に至る途中ではあるが、むしろそこで感覚—運動連合が緩やかにしか形成されていないからこそ、我々は複数の選択肢を保つことが出来るのである。別の角度から言えば、感覚—運動連合を或る程度は構成できているからこそ、すなわちそれら選択肢同士を構造化し連関させられるからこそ、合理的な行動選択の自由を持っていると言うことが出来るのではないか。そうであるとすれば、本章冒頭の引用で「生まれかけの自動運動」と呼ばれていたものは、それぞれ弱い親近感によって行動を示唆するものの直に行動に移されはしないような、相結び合う複数の選択肢の全体、つまり知覚と運動の組織化の過程的な状態を指しているのだろう。我々はその内実を闡明せねばならない。

第二章 思惟から運動へ、運動から思惟へ

本章では、まず「生まれかけの自動運動」の全容について関連概念や発展的な概念をも射程に入れつつ考究し、そして、その背景となっていた注意の構造の全容を通覧する。この「生まれかけの自動運動」は、注意的再認の過程で獲得され、行動に関連する知覚を際立たせるとされていた。ここで実質的に主題となるのは「生まれかけの運動」を含んだより正確で包括的な概念、「図式」の概念である。以上の趣旨から、『物質と記憶』で扱われた「運動図式 (schème moteur)」の概念のみならず、その発展形とも言える「動的図式 (schéma dynamique)」をも検討する。「動的図式」は、論文講演集『精神のエネルギー』所収の論文で、『物質と記憶』刊行 (1896 年) の 8 年後の 1902 年に発表された「知的努力」にて提出された。本章の論述は、主にこの両者の間を揺動しつつ、注意の作用における身体と記憶力、ないしは運動と思惟の動的な連繫を手繰ることになる。まず二種の図式を順に比較しつつ検討し、その後、両者の接合点を探っていく。

第一節 二つの図式とその構成

前章の習慣の獲得過程の分析を振返れば、或る程度町歩きに習熟してくると、知覚に対応する諸々の運動が身体のレベルでそれぞれ連関し合うのと同時に記憶による知覚の補正が行われることがまず指摘されていた。また、そこにおいて「互に結合されて連続した諸々の運動、互に要求し合う諸々の運動」として感じられる、この諸々の運動が「生まれかけの自動運動」と呼ばれていた。しかし、この「生まれかけの自動運動」という概念が一見したところ一種の身体的な感覚のように考えられる一方で、同時に、有益な記憶心像の投射という精神的な機能までも備えているという事態はどのように理解したら良いのだろうか。『物質と記憶』のベルクソンは、そのような事情を一つの問題に包括するために「運動図式」という概念を考案したのである。それでは、ベルクソンが持ち出すところの絵を描くという事例を元に、運動図式の正体を考えていこう。

我々は通例、イメージが対象と似ているかどうか常時確かめつつ点を結んで描くのではなく、モデルを見るか考えるかした後にそれを連続した線で描く。この時、我々はモデルの部分を一把握し集積して全体を構築しようとしているのではなく、モデルの全体像を描く前に一度に看取している。ベルクソンは、このようにモデルの全体像を一挙に把持するというこの我々の能力を、「最も普通の輪郭の組み立て (organisation) をすぐさま見抜

く習慣 (habitude)、すなわちその図式 (schème) を一息で描く運動傾向 (tendance motrice) 」 (MM,106/243) として洞察する。

ここで肝要な点は、「習慣」と呼ばれるこの態勢が、身体的運動との強い連関を示唆する語である「運動傾向」と言われつつも、飽くまで「組み立て」、すなわち有機的な図式を看取る能力であると言明されている点である。このことは、習慣が決して（実際に運動神経を使い、手を動かして描く）運動メカニズムのことを指している訳ではなく、むしろ運動メカニズムの作動からは独立した契機、すなわち組み立ての認知としての図式を有していることを意味する。先に言われていた「生まれかけの運動」とはこの運動傾向に外ならない。従って、「生まれかけの運動」は運動メカニズムによってなされる運動が未完成な状態なのではなく、むしろ感覚—運動連合構造を利用した運動の認知のことを指していると考えるべきである。

つまり、習慣とは運動の習慣になる前にまず認知の習慣なのである。これは実際にベルクソンが持ち出す事例だが、アルファベットの文字に限って視覚的再認が失われる失読症の患者は、文字を文字として認識出来ないにも拘らず、書き取りや自発的に書く能力はそのままに保持しているという。この症例の場合、実際に手を動かして文字を書ける訳だから運動メカニズムは無傷なのであり、それとは独立した「見た対象の分節を見抜く習慣、言い換えれば対象の視覚的知覚を対象の図式を描く運動傾向によって完成させる習慣」 (MM,106-107/243) が失われているのだ。そして、状況に併せてこの対象の図式を描き出すことで知覚を補完し、対象をより深く理解する状態こそ、ここで「習慣」と呼ばれている事柄に外ならない訳である。

そして、ベルクソンはこの対象の図式というものを「運動図式」として定義する。例えば外国語は、最初雑音としか聞こえないものの、学んでいくうちにその音の分解と再構成を経て、その語や音節を区切って聞き取れるようになる。この時、我々は「聞かれた節を分解し、そしてその主要な分節を際立たせることが出来る生まれかけの運動を、聴覚的印象は組織する」 (MM,121/255) のである。生まれかけの運動とは、「聞き手が、運動の大筋と主要な方向で話者の運動を見出すことが出来るような単純化された図像 (figure simplifiée) 」 (ibid.) を描くような「生まれかけの筋肉感覚 (sensations musculaires naissantes) 」 (ibid.) であり、これこそが運動図式である。第一章で論及した反省における分解と再構成は、この運動図式の展開過程を指していたのである。

運動図式は発動されるべき運動を始める際の感覚であるのみならず、その後の大まかなすがたを「単純化された図像」という形で前もって形成している。これは先の絵を描く事例で言えば、モデルの全体像に相当するものである。また、それは単に何らかの図像であるに止まらず「先行する運動に後続する運動の先行形成 (préformation) 」 (MM,102/240) であり、既に運動傾向である。加えて、発動されるべき運動の全体をそのように有機的に预示しているのは「生まれかけの筋肉感覚」という運動の初発的な感覚なのであるから、

それは「部分が潜在的に全体を含んでいるようにさせる先行形成」(ibid.)でもある。それは言わば、所与の感覚を身体の運動へと直結させるのではなくそれを言わば押し止めることで、身体の可能な運動を有機的に構造化しつつ、筋肉感覚という形において自らの身体をその内部から示しているのである。

『物質と記憶』の他の章を参照すれば、このような感覚は、外的に私の身体とその可能な行動を提示する知覚と対比され、「情感(affection)」と呼ばれている¹。『物質と記憶』第一章の冒頭において、ベルクソンは以下のように情感の分析を行っている。

「私の様々な情感を検討してみよう。その各々がそれぞれの仕方で行動への誘惑を含みながらも、同時に待つことの許可や何もしないことの許可すら含んでいる。更に仔細を検討すると、私は開始されてはいるものの実行されない運動、多かれ少なかれ有益な決定への指示を見出すが、選択が排除される強制を見出すことはない。その間に私は思い出し、記憶同士を比べるのである」(MM,12/169-170)。

運動図式の仔細を顧みれば、情感において見出されている「開始されてはいるものの実行されない運動、多かれ少なかれ有益な決定への指示」が運動図式であることはすぐさま理解出来る。反対に、運動図式の一部である筋肉感覚は、そのまま情感の一種でもあるだろう。何となれば、情感は記憶力の領域に属する心的なものではなく、中枢と末梢神経から成る「所謂感覚神経の繊維」(MM,56/204)に依存する生理学的な体内感覚なのである²。

それでは、注意的再認におけるこの運動図式と、自動的再認のシステムである運動メカニズムはどのような関係にあるのだろうか。ここで別の箇所を見てみると、例えば言葉を聞いた場合に我々が抱く運動図式は、「分節された運動へと延長される聴覚的言語印象の傾向」と言い換えられ、更にその傾向が、「確かに我々の意志の習慣的統御から外れることはなく、初歩的な弁別作用(discernement)をも恐らくは含んでいて、正常状態においては、聴かれた言葉の目立った特徴の内的反復に翻訳される」と説明されている(MM,125-126/258-259)。「内的反復」という言葉は独立した記憶力の関与を、そして「初歩的な弁別作用」という言葉は語の意味からしてそこで行われる「分解と再構成」とを含意しているだろう。つまり運動図式は、自動的再認が組み込まれた運動メカニズムの構造から外れることはないが、弁別作用を含んでいる点で或る程度知的な選択の余地、記憶力の認識的使用の余地を含んでいる。これは同時に、運動図式が飽くまで行為への志向が前提となつてはいるものの認識論的機能を負っていることも示している³。「記憶心像の規則的介入」(MM,107/244)という注意的再認の回路の中にあつて、運動図式は「略画」(MM,123/256)「下絵」(MM,123/257)「空の容器」(MM,135/266)として、すなわち「知覚を継続させ、知覚と想起されるイメージの間に共通な枠として役立つ模倣運動」

(MM,112/248)として発現するのである。つまり図式は、運動メカニズムの感覚—運動連合に限定されつつも、まさにその限定ゆえにこそ、単にバラバラに考えられていた複数の選択肢同士を接続することが可能なのである。記憶心像の次元でも筋肉感覚の次元でも、それは選択肢同士の共通の枠となっているのである。運動の決定までのこの緩やかな接続が知的な選択の余地を担保し、運動の自発的な発展可能性を孕んでいる。この意味において図式はまさに、精神と身体の間、「意志と自動機構の境界」(MM,128/260)にある。

ところで、そうだとすれば、その境界において意志ないしは弁別作用の側面により接近することで身体運動への傾向という限定から離れた図式、言い換えれば、純粋な記憶力の働きの観点で純化された図式の問題も考えられ得るのではないか。事実、ベルクソン哲学の展開の中で図式概念は、運動の認知に止まらず、広く我々の知的な所作一般にまで拡張された。それが「動的図式」である。

運動図式が何らかの身体的運動に直接結び付く形で機能していたのに対して、動的図式は、運動の理解のみならず、想起、知解、創出など知的な精神的営為一般に結び付いている図式である⁴。運動図式が対象の印象であると共に身体の自動的運動の印象そのもの、すなわちそれ自体が筋肉感覚であるから直近に運動メカニズムを指示しうる一方で、動的図式は飽くまで「(運動の)イメージそのものというよりもそれらを再構成するためになすべきことの指示を含んでいる」(ES,161/937)ような、一つの「意味(*sens*)」(ES,171/944)である。具体的な事例において述べれば、動的図式とは、例えば誰かの名前を思い出そうとする時に既に保持している「一般的な印象 *impression générale*」のようなものである(ES,181/952)。より構造に即して詳言すれば、それは「単純ではあるが、多様なイメージに発展可能な一つの表象」であるのだが、それぞれのイメージを貧しくして得られる諸イメージの抽出物でも、イメージの全体を意味するものの抽象的な表象でもなく、それ自体一つの表象である(ES,161/936-937)。つまりそれは、「想起されるイメージと同様に完全なものだが、イメージが外部的にお互いを展開させていくであろうものを相互的な含み合いという状態の元に持っている」ような「全体の表象的図式」(ES,164/938)である。

この点だけ見ると、運動図式と殆ど同じ概念をただ審らかに論じたものが動的図式に思えるが、両者の違いは運動の筋肉感覚か、それを指示する意味かという点に止まらない。動的図式においては、更にそれら運動の諸部分相互の時間的な関係という側面が強調されていると同時に、運動の認知という側面がより強調されている(ES,178-179/950)。運動図式のようにそもそも筋肉感覚を以て図式が示される訳ではないからなのか、とりわけ新しく習得する運動の試み(例えばワルツを踊ること)として動的図式が用いられる場合は、古い習慣(例えば歩くこと)の抵抗を受けることが同じ箇所では強調されている。しかもその際、抵抗となるはずの古い習慣の構成要素と同一か、類似した部分的で基礎的な運動感覚ないしはその表象(これは「運動感覚的イメージ」(*ibid.*)と呼ばれている)を運動の習慣として既に持っていなければならない、と条件付けられている。何となれば、動的

図式を満たしてそれをイメージへと発展させるのは、既に習得されているこれら諸々の微小な運動メカニズムの習慣なのであり、その展開の只中において手探りで試みられているのは、まさにこれらの組み替えなのである。そして、そのような労苦を伴う試みの間中、戦い合い交叉し合う「諸表象の運動」(ES,183/954)が動的図式なのである。

このような部分の相互的な含み合いをそれぞれ別の相互外在的なイメージに展開するという図式の運動こそが、論文の題名ともなっている「知的努力 (effort intellectuel)」なのである(ES,173/946)⁵。ベルクソンによれば、「知的努力というのは、一つの同じ表象を、意識の異なる平面を超えて、抽象的なものから具体的なものへ、図式からイメージへと行く方向へ導くことにある」(ES,176-177/948)⁶。この知的努力は図式の発展の際に努力の感情 (sentiment)、具体的には「組織化 (organisation) という形の鮮明な感情」(ES,182/953)として感じられる。この「感情」の概念は、感覚や表象と区別され、意識によって立てられるその両者の中項として考えられている(ES,184/954)。身体において局在的な感覚と異なり、感情は件の「親近感」のように非局在的に知覚の意識に随伴している。この点においても、「感情」であるところの動的図式は、単に身体感覚としての「情感」であった運動図式よりも一段と精神的に純化された性質を持っていると言える。

しかし、だからと言って動的図式が運動図式と全く異なる精神の位相に止まる訳ではない。確かに、知的努力自体はこのような精神の運動についての意識ではあるように思える。とはいえ、それはやはり最終的には何らかの行動を志向していることには相違ないゆえに、身体的に感じられる情感、言わば心的な揺らぎに伴う感覚の倍音によって彩られていることを忘れてはならない(ES,183/954)。知的努力は、的確な表象が「優れて明晰判明」(ES,184/955)なものとして決定するまでの間、我々の知性を逡巡させ宙吊りにする。この過程で、「身体の不安」(ES,183/954)の「感覚 (sensation)」が産出されるのである。知的努力の感情は、現在の感覚と想起される表象の間にあって両者を連続させようとする精神の組織化運動の感情であると共に、身体の次元においては感覚—運動連合が自動化されていないという不安の感覚をも産み出すものでもあるのである。

また当然ながら、動的図式も知覚と記憶の動的な循環である注意的再認の過程のうちにあって働くものなので、知覚からのフィードバックによって自身の姿も変容させる。但し、動的図式の場合は、運動図式の場合のように「閉じた回路」を形成するのではなく、むしろそれを破り出すのである。このことについて、ベルクソンは、「図式は自らを満たそうとするイメージによって変容する。多くの場合、決定されたイメージの中には初期の図式は最早何も残っていない」(ES,175/948)と語る。例えば、「小説家や詩人によって作り出された人物が、その人物が表現しようとした観念や感情に逆に働き掛ける」(ES,175-176/948)ことは大いにある。図式は「予想だにせぬ部分」(ES,176/948)を持っているのであり、「これはイメージが図式へと訴えて、図式を変容させたり消失させたりする際の運動のうちにある」(ibid.)のである。動的図式は、この予見不可能性、もっと

言えば創造性の故に、閉じられた回路に止まる運動図式を超える。動的（dynamique）な図式は、ギリシア語の語源そのままに、潜在的（dynamique）な図式でもあるのだ。ここにこそ、動的図式の創造性が存している。

第二節 二つの図式と一般観念

前節に置ける動的図式と運動図式の対照は、以下のように要約できる。まず共通点として、運動図式も動的図式も共に運動の有機的で可変的な表象であることが挙げられる。反対に、相違点として考えられるのは、身体と記憶力の関係におけるそれぞれの位置である。運動図式は、記憶力の活動を包含してはいるが、飽くまで生まれかけの運動の筋肉感覚として稼働していた。それに対して動的図式はといえば、確かに情感を伴うことで身体行動を予示してはいたものの、それ自体は知的努力という記憶力の作動そのものの感情として稼働していた。よって、動的図式は運動図式と基本的に地続きの発展的概念でありながらも、より記憶力に固有の契機を指している概念である。

ところで、『物質と記憶』においては、動的図式のように身体から或る程度独立した形で働く記憶力の能動性が考えられていなかったのだろうか。否、『物質と記憶』においても既に「観念（idée）」ないしは「一般観念（idée générale）」という形で類似した概念が考案されていた、と考えるべきである。結論を先取りすると、これが本節の主張である。実際、同書第二章の後半箇所で「諸観念、つまり純然たる記憶は、記憶力の底から呼び出されると、記憶心像へと発展し、そうして運動図式の中へ入り込むことがますます可能になる」（MM,140/270）と言われているように、ベルクソンは観念を記憶と捉えている（嘗て純粹記憶が「観念性」と形容されていたことを想起して欲しい）。つまり彼は、実際に観念が思考に上る場合、それは具体的な記憶心像として物質化され、知覚へ混入していくと考えている。ところで、その過程こそまさにかの図式であった。更に同書第三章では、図式概念構成とそのまま重ね合わされるかの如く、「一般観念の本質は、行動の領域と純粹記憶力の領域の間を休み無く動くことである」（MM,180/301）と定義されている。先程の「知的努力」の記述を彷彿とさせるこの言葉だけでも、一般観念が特に動的図式の類縁であるように思える。ここでは『物質と記憶』第三章の一般観念についての議論に沿い、その消息を辿ることでその概念的な同一性を論証したい。

まず、ベルクソンによれば、我々の認知は一般と個物の中間の認識から始まるという。一般から議論を開始する概念論と個物から議論を開始する唯名論の双方に反駁しつつ、彼は言う。「従って我々は個体の知覚からでも類の概念からでもなく、中間的認識から、つまりは目立った質（qualité marquante）或いは類似についての混乱した感情（sentiment）か

ら出発するように思える」(MM,176/298)。すなわち、一般観念の起源は、「類似についての混乱した感情」である。逆に、截然と知覚される個体や単に思惟される類は、この内実の混沌とした感情からの「分離」(ibid.)という作業、つまりかの分解と再構成を経て生み出されるものなのである。他方でこの類似の感情自体は、単に傾向や欲求に従った非意志的な「有益なものの識別」によって、つまり行動の原初的な必要性によって生み出される。であるから、有益なものの識別は、人間のみならず他の動物でも行っている。例えば、「草食動物が惹かれるのは、草一般(*herbe en général*)である」(MM,177/299)。動物達には草の匂いや色などの質や種類は或る「力⁷」(ibid.)として感じられるが、それこそが彼等の知覚に第一に与えられて彼等の行動を誘い出す所与である。この力として行動を引き出す類似は、自然法則のように客観的なものである。記述を読めば、塩が酸から塩基を取り出す作用と、植物が自身を養うのに役立つ同じ要素を多種多様な土壌から引き出す作用の間には、本質的な違いが無いとまで言われている(ibid.)。このような反応の誘致を含んだ半ば生得的な類似の認知、「表面的には異なる作用に対する反応のこの同一性」(MM,178/300)が、精神により構成される一般観念の始点となる。第一章で検討した習慣獲得の三段階で言えば、この種の類似の認知は、最初の何も知らない段階において見出される、諸々の離散的な選択肢に相当するだろう⁸。続いて、ここからどのように一般観念が生成するのかを見ていくことにしよう。

「感覚は不安定である。というのも、感覚は最も多様なニュアンスを取りうるのである。反対に、運動メカニズムは、一度配備されると、同じ仕方で変化無く機能するであろう。従って、表面上の細部において可能な限り異なっている諸々の知覚を想定しうる。その時、知覚が同じ運動的反応によって継続されるならば、生体が知覚から同じ有益な結果を引出せるならば、知覚が身体に同じ態度を刻み付けるならば、共通の何かがそこから得られるであろう。そして、そのようにして一般観念は、表象される以前に、感じられ、被られているであろう」(MM,178/300)。

ここでは、感覚の多様性ではなく運動メカニズムの一様性が、言い換えれば、知覚そのものの部分同士そのものの類似性ではなく身体による反応ないしは得られる有益な結果の共通性が一般観念を構成する、ということが考えられている。一般観念の萌芽とは、まさに感覚—運動システムの共通性なのであり、そこに随伴する感情として「感じられ、被られている」のである。第一章で論じた、かの再認において覚える親近感はこのような感じられる一般観念と言えるだろう。しかし、感覚に対応する反応を反復し態度として刻み付けるというここでの作業は、対象の分解と再構成の過程を含んでいない点で、注意的再認の反復の過程とは明確に異なる。

ともあれ一般観念は、まずこのような「感じられ、生きられる類似、或いはお望みなら自動的に演ぜられる類似」から始まるのであり、その後ではじめて「知的に覚知され思考される類似」として、つまり観念として表象される (ibid.)。この後者の類似が普通に言うところの一般観念である。この一般観念を鑄造する過程において、類似と一般性をめぐる問題の内実、運動から運動の理解へ、そして純然たる知解の領野へ移行しつつある。今、運動図式の駆動を経て、身体運動からより離れた動的図式の次元へと変容する、まさにその境界が焦点なのである。更にベルクソンの記述を追い掛けよう。

「精神が結局行き着くところの類似は、知性的に覚知される、ないしは思惟される類似である。そして、まさにその進展の過程でこそ、悟性と記憶力の二重の努力によって、個体の知覚と類の概念が構成されるのである。—記憶力は自発的に抽象された類似へと区別を接ぎ木し、悟性は類似の習慣から一般性の明晰な観念を取り出すのである。この一般性の観念は、始めは、多様な状況における同一の態度についての我々の意識でしかない。それは、運動の領域から思惟の領域へと上昇する習慣そのものでもある。しかし、習慣によってそのように機械的に描かれた類から、その操作そのものの上で完了せられた反省の努力を通して、類の一般観念 (*idée générale du genre*) へと、我々は移ったのである」(MM,179/300-301)。

ここで言われている「記憶力と悟性の二重の努力」は、すぐ後で「反省の努力」と言われていることから、注意的再認、またそれに伴う知的努力を指していると思われる。注意的再認の反復の文脈から論じ直せば、区別は悟性による分解に、そして自発的な類似への接ぎ木は記憶力による再構成に対応していると言えるだろう。注視すべきは、単なる生きられた類似から明晰な一般性へと進むこの作業の過程にあるものとして、「一般性の観念」が「運動の領域から思惟の領域へと上昇する習慣」である、と説明せられている点である。つまり、「一般性の観念」は、特定の運動の中での態度に伴う運動の意識ではなく、態度の同一性そのものについての思惟の意識である。ゆえに、この箇所で言及されている「反省の努力」にて問題になっているのはそれら箇々の態度そのものではなく、それらの態度の意味であろう。ここにおいて、議論は運動図式を踏み越えて動的図式の領野へと接近していると言えるのではないか。

ともかくもこのようにして注意的再認の過程を洗練させることで、単に運動の認知だけでなく、知性的な「類の」一般観念、つまりは包摂する一般の認識が可能になる。また同時に、これもまた同じ知的努力を経ることによってであるが、その類に包摂される個体の認識も同時に可能になる。それでは、この努力の結果が何に、どのように繋がるのか。

「そして一度この観念が構成されたら、我々は、今度は意図して数限り無い一般的な概念を構成する。ここでは、この構成の委細に至るまで知性を追う必然はない。悟性が、自然の仕事を真似て、自分自身の方でも、今度は人工的な運動器官を作り上げる、と我々は言うに止めよう。そうすることで、悟性は、数限り無い個体的な対象に対し、その数限りある運動器官を以てして対応させたのである。このメカニズムの総体が分節化された言語なのである」(ibid.)。

つまり、分節化された言語とは知性により人工的に形成された一種の運動器官なのである。この「人工的な運動器官」は、一定の語の運動、つまり、図式を充実する運動だと言われていたかの聴覚的イメージ（ないしは視覚的なそれ）を指しているだろう。そして、類の一般観念をこのような語に固定し、そこに意味を結晶化させていく作業こそ、意味を持った言語の創造である。勿論、言語の完成を以て精神の活動が終わるのではない。むしろこの作業が無数に繰り返されて、一度出来上がった運動メカニズムを変容させることで、次なる言語の習得が始まるのであり、これこそ運動図式の分析で検討した事例であった。その間、一般観念は、或る一つの運動メカニズムという明瞭なすがたと（今しがた言及した語の発音への意味の結晶はまさにこれである）、無数の個別的な記憶という脆弱な統一性しか持たない曖昧なすがたの間を往還する。というより、それは運動メカニズムの領域と純粹記憶の領域の間の往還そのものなのである。ここにおいて最早精神は、運動図式という身体的運動と融合した領域ではなく、動的図式という運動の純粹な意味＝記憶の領域に達しているだろう。だとすれば、「知的努力」で論ぜられているような創造の局面が考慮されていなかったことは否めないにしても、『物質と記憶』の段階で既に、知的な意味の領野における図式という形で、動的図式の萌芽は示されていた、と考えられるのではないか⁹。そしてこのあわいにこそ、運動の認知の習慣から純粹な思惟の習慣までを一貫し、それらを可能にする、或る精神そのものの習慣が垣間見えているのではないだろうか。

第三章 精神の習慣

前章では、運動図式、並びに動的図式の概念的実質、更に両者の接合地点として一般観念論を検討した。その過程において見出されたのは、与えられた感覚を瞬時に解し、それに一対一で対応した反応を引き起こす自動的再認の習慣だけではなかった。むしろ、図式を用いることにより感覚に対して複数の組織化された選択肢を惹起し、対象を認識する注意的再認の習慣の方が重要な成果であったと言えよう。しかし、そのように余りに

も包括的な概念であるだけに、一体どこに主軸を置いて全体を捉えるべきかが依然として不明瞭のように思える。本章の探求はその軸を明らかにすることを目指す。

今までの検討からすれば、一見してその任は図式にあるように思える。しかし、注意せねばならないことに、図式そのものは習慣ではありえないのである。事実、可能的行動としての知覚の表象が行動に移されれば消失する如く、図式はイメージや運動として達成されたら消えてしまうのである。動的図式は、イメージとして完成してしまえば当のイメージの背後へと消えてしまうと明言されている（ES,188/957）。運動図式についても、「幾つかの生まれかけの筋肉感覚から成る想像的図式は、単なる粗描に過ぎない。現実にかつ完全に経験された筋肉感覚はそれに色彩と生命を与えるのである」（MM,123-124/257）とされているが、「色彩と生命」を与えられれば図式は印象としては失せて完全に運動に変化してしまうだろう。飽くまでも、図式が習慣なのではなく図式を描くような運動傾向こそが習慣なのである。

ところで、第一章で見て来たように、この運動傾向は、感官の教育による運動メカニズムの醸成を前提としている。それ故、何の手掛かりも持たないものに対してインスピレーションを自ら湧かすことが出来ないように、運動傾向として或る程度形成された運動メカニズム無しには図式を意図的に思い浮かべることは出来ない。但し、精神には固有の能動性が付与されているので、運動傾向がほとんど構築されていない段階であっても、類似する記憶が何らかの形で現実化すれば、何らかの形で図式が発動する局面は考えられる。そのような、運動図式が生成し始める一回目の運動が行われる場面について、ベルクソンは図式の存在を示唆しつつ、次のような印象的な言葉で語っている。

「例えば、我々が学課の修得に励んでいる際、我々が運動をもって再構成しようとしている視覚的ないし聴覚的イメージは既に我々の精神のうちに、見えないながらも現前しているのではないか。最初の暗誦の折、意識の仄暗い深みから一種の警告を受け取っているかのように、我々は自身が今しがた犯してしまった誤りを、不調の曖昧な感情（*vague sentiment de malaise*）において認める（再認する）。では、ここで諸君が経験するものに集中してみよう。諸君は完全なイメージがそこにあるのを感じるだろう。しかしそれは、束の間のイメージ（*image fugitive*）、真の幻であって、諸君の運動的活動がそのシルエットを固定しようとするまさにその時に消えてしまうのである」（MM,92/232）。

この事例では、最初の暗誦なので反復がまだなされておらず、運動メカニズムの組織化が全く不十分である。つまり、ここにおいては、身体傾向としての習慣が運動メカニズムの中に形成されていないため、運動メカニズムをトリガーとしないままに、ほとんど記憶力による想起だけが働いている。そうであるから、学課の運動図式は、生まれかけの運動

の筋肉感覚という側面を持たず、ただ私の奥底に潜む幽かなイメージとして僅かに顔を出すに止まっている。恐らくそれは、図式に嵌め込まれるべき感覚-運動のイメージがまだ運動メカニズムの中に存在しないからであろう。しかしそれでも、確かに曖昧ではあるとはいえ、図式は不調の「感情」という形において、潜在的な精神の暗みから自発的に到来している（ベルクソンはここでも身体的な含意を持つ「感覚」や「情感」ではなく心的な含意を持つ「感情」という語を用いている運動ではなくイメージが示される点を考慮しても、「束の間のイメージ」の含意は運動図式よりもむしろ動的図式に近いと考えられる）。このように、運動メカニズムの構築（つまり感官の教育）が不十分な段階な場合であってさえも、記憶力という精神の側は現実には適合し行動に寄与しようとしているのである。

つまり、精神の動きは、教育された運動メカニズムから成る身体を前提とし、それに運動するのでありながら、それだけに止まらない能動性を持っているのである。実際上記の事例からして、図式が状況に併せて柔軟に機能するためには、身体というよりは記憶力そのものに一定の望ましいあり方を考えざるを得なくなるだろう。要するに、習慣的な身体の構成に即して働き、そのメカニズムを最大限に利用しつつも、単に自動的な反応に身を任せるのではない記憶力の能動性が無ければならない。そしてその態勢において、記憶力は眼前の現実において利益になる記憶をその都度的確に選択し、最大限に想起する必要がある。言い換えれば、習慣が機能するためにはまず「精神の正常な働き」（MM,193/312）、ベルクソンの術語を使えば、「生への注意（*attention à la vie*）」（*ibid.*）と呼ばれる精神の根本的なあり方が始めになければならないのである。これは、記憶論的に言えば、良識（*bon sens*）或いは実践感覚（*sens pratique*）（MM,170/294）という概念に相当する。この概念は、運動メカニズムと記憶力という両者の間で勝れて均衡の取れた精神的確さを指しており、「現状の輪郭を的確に追うには十分素直だが、あらゆる他の呼び掛けに対しては抵抗出来るほど勢力的な、記憶力の恵まれた性向（*disposition*）」（*ibid.*）と定義されている。ここまでの成果を援用すれば、この「身体の生物学的な機能に意識の心理学的な形式を調和させること」（ヴォルムス）¹⁰において、「現状の輪郭を的確に追う」ことは注意的再認における記憶の投射を意味し、「他の呼び掛けに対して抵抗する」ことはその過程で知覚や感覚に適合しない記憶の記憶心像化を排除することを意味していると考えられる。よって、良識は、第一章で論述した記憶力の運動の分類でいえば、具体—抽象の度合の往還である並進運動というよりはむしろ、その対象となる記憶の領域を定める自転運動、それも、現実一般に対する自転運動、的確な箇々の自転運動を的確たらしめる自転運動であると言える。これは、第一章で指摘した注意的再認における自転運動の主導と一致する。

それでは逆に、良識の働いていない時、精神はどうなるのか。記憶力が記憶領域の拡張において箍を外し、暴走するのである。そのような状態は、現実への関心を失い無益に記憶の中に没入すること、つまり夢を見ることであると言われる（*ibid.*）。ここでは、夢の

状態に関する細密で具体的な記述として、『精神のエネルギー』所収の講演「夢」の記述を少し引いてみたい。

「視覚を解釈する記憶が自由を取り戻します。視覚は流動化して、記憶もまたそこに適合しないようになります。解釈する記憶力のリズムはこうして最早現実のリズムを採用しなくなるのです。そしてイメージは好きなように、目の回るような速さで、丁度制御されていない映画のフィルムのイメージのように急ぎ進むのです。早いということは充滿しているということと同じように、精神の領域では力の印ではありません」(ES,106/895)。

夢から目覚める時は、良識が努力を伴いつつ記憶力を緊張させ現在へと向き直ることで、速度を元に戻すのである。逆に言えば、良識が無ければ我々は正確に注意的再認を行うことが出来ない、つまり対象を正確に認識出来ない。夢の中では、努力は消え失せ、記憶力の緊張は緩むのである。夢においては、例えば白い点の付いた緑の染みが視覚に浮かべば、その印象が芝生と花の記憶を（記憶心像として）物質化したり、球の載ったビリヤード台の記憶を物質化したり、或いはその他のものを物質化したり、というように、あらゆる記憶が気ままに感覚を追い掛ける。第一章で論じた記憶力の活動の原理で言えば、記憶の調節弁である自転運動の箍が外れ、類似した記憶を探す並進運動が無作為に記憶を想起させてしまうのである。このように感覚のニュアンスに任せて図式が現実化するのを無為に待っているだけでは、我々は正確に注意的再認を行うことが出来ないのである。反対に、現実適合して生きるためには、まず精神的生が努力し、そして「調整的的確さ」(ES,104/893)をもった本能的な自転運動によって注意した上で、閃光のような図式の湧出を待たねばならない¹¹。このような夢と対比される精神の「目覚め」について、同書所収の別の論文「現在の記憶と誤った再認」においては次のように語られている。「夢の生であるところの拡散した心理的生を限定、集中、緊張させることによって得られるものこそ、目覚めてあること (veille) なのである。或る意味で、夢の中で活動している知覚と記憶力は、目覚めている時のそれらよりも自然なのである」(ES,128/911)。そしてこの後、ベルクソンは、「目覚めていることは意志することである」(ibid.)と結論する。無論、この「意志すること」は、何か特定の行為を意志することではない。文脈から考えて、それは、眼前に広がる現実そのものに対し目覚めてあること、すなわちそこに適応することを意志することを意味していなければならない。そうだとすれば、先に「良識」或いは「生への注意」と呼ばれた概念は、まさにこの意味における「意志すること」に相当することになる。

従って、良識、ないし「生への注意」は、通常の意味での習慣の根源であるのみならず、それら習慣を可能にしているところの精神の「目覚め」なのである。また、その持続性という観点から述べれば、それこそが精神の根源的習慣とさえいえるのではないだろうか。

ともあれ、『創造的進化』の言葉を借りるのであれば、以上の事柄がまさに「實在の連続的経験」（EC,213/675）そのものであることに変わりはないだろう。

結論

我々ははじめに習慣獲得の過程を分析するところから始め、更にその過程において身体と精神の紐帯をなす図式の概念の研究、そしてその類似概念としての一般観念の研究を経て、その果てにある図式の可能性の条件として、「良識」或いは、「生への注意」という記憶力の原本的な志向性の概念へと逢着した。精神の「目覚め」とも言うべきこの「生への注意」は、記憶力の的確な調整に図式を用いて習慣を造り出すことで諸々の習慣の根源をなしているのと同時に、そのように新たな習慣を産み出すために絶えず現実に適応する記憶力の性向という意味において根源的習慣である。身体運動の硬直した自動化でもなく、精神の徒な自由でもなく、その何れの誘惑にも屈せず常に身体と精神のあわいにあり続けること、これが精神の功利的な積極性なのである。

しかし、本稿で叙述した行動論的側面は、序で述べたように創造的な生命をこそ實在として捉えるベルクソン哲学全体においては通例その「影」の部分に相当するとされる。その点に真っ向から反論するつもりはない。しかしながら、本稿において、むしろそのような惰性的で非創造的な習慣的な生にも「努力」を原理とした可変性が備わっていること、そして根源が精神の能動性に置かれていることを、図式論の検討および良識論、「生への注意」論の示唆を通じて理解することが出来たはずである。殊に動的図式概念において、単に知覚と記憶が円環構造を形成するだけでなく、その円環そのものに変容をもたらすような創造的な作用が含意されていることは銘記しておくべきことだろう。しかし、多くの課題が残されている。試みに列挙すれば、このプラグマティックな「生への注意」が『創造的進化』以降において形而上学的な實在として捉えられるようになる生命の概念、エラン・ヴィタールとどのような関係にあるのか、という問いがまず考えられなければならない。また、本論で取り扱った『物質と記憶』の記憶論（および記憶力論）が『意識に直接与えられたものについての試論』における純粹持続（及びその空間化）とどのような関係にあるのか、という問題が、図式論の根柢に横たわっているだろう。恐らくは、このような問題を解き得た時はじめて、形而上学的プラグマティズムとしてのベルクソン哲学の全貌を明徴することが出来るはずである。

凡例

ベルクソンの著作の引用は quadrigue 版および以下の著作集（共に PUF）を使用する。

Bergson, *Œuvres, édition du centenaire*, Paris, PUF, 4^e édition, 1970.

典拠は、引用文ないしは引用された語句の末尾に（著作名の略記, quadrigue 版の頁数/Œuvres 版の頁数）の形式に従って略記する。

各著作の略称に関しては以下の通りである。

DI, *Essai sur les données immédiates de la conscience*, 1889.

MM, *Matière et mémoire*, 1896.

EC, *L'Évolution créatrice*, 1907.

ES, *L'Énergie spirituelle. Essais et conférences*, 1919.

PM, *La Pensée et le mouvant. Essais et conférences*, 1934.

注

¹ ベルクソンの前著『意識に直接与えられたものについての試論』第一章においては、快楽や痛みなどの「情感的感覚」と、色、光、音、或いは味や匂い、温度などの「表象的感覚」の区別および両者の関係、そして表象的感覚への情緒的感覚の混合が語られており (DI, 24/24-31/31)、『物質と記憶』中の情感の議論はその発展と考えられる。

² 但し、情感が必ずしも運動図式を伴う訳ではない。実際、ベルクソンは情感の一典型として「痛み」を挙げる (MM, 56/204)。痛みとは「傷付けられた部分が事態を回復しようとする努力—感覚神経への一種の運動傾向」（ibid.）なのであるが、それは傷付けられた部分の「局所的な努力」（ibid.）でしかないため、迫ってくる危険と全く釣り合わず、生体は全体の結果に対応出来ないで、「無益な努力」だとされている。情感は、外的な運動を最早反射せず、それと「戦い、その内の何物かを吸収するのである」（MM, 57/204）。このような情感が感じられるのは、針が身体に突刺さった場合のように、実際に身体と対象との距離がゼロになり、知覚すべき対象が私の身体と一致してしまった場合である。この時、痛みは「現実的行動（action réelle）」（MM, 58/205）なのである。これと反対に、運動図式における生まれかけの筋肉感覚は飽くまで「可能的行動」に止まるのであり、むしろそれゆえにこそ、身体全体の「有益な努力」足り得ていると言えるであろう。

³ この「弁別作用」とは、物質的世界から我々の欲求や機能に関係無いものを排除し、必要なものを選択して知覚を構成する作用のことだが、これは我々の持つ積極的な何かであり、「精神の到来」を告げている、と言われている（MM, 35/188）。

⁴ ここでその詳細を議論する暇はないが、実際、ベルクソン研究の中ではしばしばこのふたつの図式の概念的な関係性が議題になる。例えば、ドゥルーズは『ベルクソニズム』において、運動図式を感覚—運動的なもの、動的図式を純粹に心理学的ないしは記憶論的なものとして、二つの図式を峻別しているが (G. Deleuze, *Le Bergsonisme*, Paris, PUF, 1968, p. 64.)、瀧一郎氏 (同氏「努力の機構（メカニズム）—ベルクソンにおける「運動図式」と「力動的図式」—『研究』十、東京大学文学部美学藝術学研究室, 1992, pp. 163-185.)、岩田文昭氏 (『フランス・スピリチュアリズムの宗教哲学』創文社, 2001, pp. 94-95.) などは記述の対照や講義録や会議録の渉猟など文献学的見地を援用しつつドゥルーズ解釈を批判している。その主張によれば、ベルクソンは、運動図式と動的図式が努力や創造の問題を考えるにあたって不十分であることに気付き、動的図式を考案したという。我々は、動的図式

が運動図式の延長線上にあるとする瀧氏や岩田氏のこの主張に関して、両者を連続的に捉える点で同意する。しかし同時に、我々は、運動図式概念に固有の存在意義を認める点で、立場を異にする。すなわち、運動図式が持つ運動メカニズムとの本性的な連動性が、動的図式の場合では飽くまで知的努力に付随するに過ぎないことを鑑み、両者は連続しつつも各々別の契機を担うと考えるのである。本稿で検討している功利的な身体的行動の場面においては、それ自体情感であるところの運動図式が、直接に行動を暗示する点で、やはり特有の地歩を占め続ける。

⁵ 『物質と記憶』においても、そもそも図式を形成するような自動化への運動傾向には「或る初歩的で知的な働き (un certain travail intellectuel rudimentaire)」(MM,128/260) が必要ではない、と言われている。

⁶ 『物質と記憶』でも論及されていた身体的な努力、つまり運動図式から身体運動への移行の際に感じられる努力については、デューイの学説を引きながら、「相違しつつも同時に類似している二つの習慣の戦い」(ES,178/948-950) の表現であるとしている。

⁷ この「力」という語は、ベルクソンの処女作である『意識に直接与えられたものの試論』において、「内的自我 moi intérieur」、つまり心的持続を表現する時にも使われており(DI,93/83)、精神の本質を表現していると捉えるべきであろう。

⁸ 永野拓也氏は以下の論文で、この「生きられた類似」を『物質と記憶』第一章における「純粹知覚」論(非人格的な、事物そのものの権利的知覚)の変奏であると論じている。Cf. 永野拓也「概念の実践的な足場--『物質と記憶』の「一般観念」論をめぐる」『哲学・思想論叢』第22巻、筑波大学哲学・思想学会、2004-01、pp. 1-16。

⁹ 「知的努力」においては動的図式が創造の場面でも使われることが明言されているが、ベルクソンは本稿で取り扱っている功利的な場面の他、それらと本性的に異なる営為である哲学に関しても図式に当たる媒介的な存在を強調している。『思想と動くもの』所収の講演「哲学的直観」において、図式は「媒介的イメージ image médiatrice」(PM,130/1355) と呼ばれ、「具体的直観の単純さとそれを翻訳する抽象の複雑さ」の中間にあって「束の間の、消え去りつつあるイメージ」であると言われている(PM,119/1347)。例えば三輪正氏は、哲学的思惟でさえ習慣化を経なければ十分な効果を発揮できない、という哲学的直観と習慣の捻れた関係に着目している(三輪正『習慣と理性』晃洋書房、1993年、p. 260-261.)。

¹⁰ Frédéric Worms, *Introduction à Matière et Mémoire de Bergson*, Paris, PUF, 1997, p. 177.

¹¹ 同じ箇所、犬の吠え声を大衆の怒号ではなく犬の吠え声として知覚するためには、「或る積極的な努力」が必要であり、それが目覚めている人にしか可能でないとベルクソンは述べている(ES,104/893)。ここで、正確に記憶を想起することで何かを何かとして認知するという注意的再認が、筋肉感覚などの身体的努力ではなく精神の次元における努力(知的努力)を要する、と考えられている点は注意を要する。